

群 教 セ	G14 - 02
	平21.241集

中学校総合的な学習の時間における 自分の考えや意見を分かりやすくまとめ 表現する力の育成

— 「まとめ・発表・交流・再構成」の段階に学習シートを取り入れた言語活動を通して—

長期研修員 大竹 敏之

《研究の概要》

本研究は、中学校総合的な学習の時間において「まとめ・発表・交流・再構成」の段階に学習シートを取り入れた言語活動を通して、自分の考えや意見を分かりやすくまとめ表現する力の育成を目指すものである。具体的には、中間発表の場面において学習シートを活用しながら「レポートを書く・説明する・助言し合う」などの言語活動に取り組むことによって、自分の考えや意見を深め、相手を意識して伝えられるよう指導の工夫を図った。

キーワード 【 総合的な学習—中 言語活動 中間発表 学習シート レポート作成 】

I 主題設定の理由

平成20年1月の中央教育審議会答申（以下、「答申」）では、言語活動の充実が、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点であると提言している。この答申を受け、平成20年3月に告示された新しい学習指導要領でも、教育課程全体で言語活動の充実を図ることを求めており、言語活動を充実させることによって各教科等の目標をよりよく実現することを目指している。

総合的な学習の時間（以下、「総合的な学習」）は、今回の改訂で各教科との役割分担が明らかにされ、探究的な学習としての充実を図ることが重視されている。探究的な学習の過程を通して、学び方やものの考え方を身に付けることが目標の一つとなっており、まとめ方や表現の仕方、報告や発表、討論の仕方などが具体的な例として挙げられている。また、言語活動に関しては、問題解決や探究活動の過程において、言語により整理したり分析したりして考え、それをまとめたり表現したりして自分の考えを深める学習活動を行うことが重視されている。このように、総合的な学習において言語活動を充実することにより、探究的な学習が質的に高まっていくことになる。学習指導要領の改訂を受けて群馬県教育委員会が示した総合的な学習の「平成21年度の指針」においても、「伝えたいことを明確にしてまとめたり発表したりする活動」を重視している。

これまでの総合的な学習における言語活動に関

しては、82.4%の教員が「自分の考えたことを発表したり、討論したりする力が身に付くような授業を心がけている」と答えている（「学校教育に関する意識調査」平成15年文部

科学省）。しかし、生徒の変化に関して「思考力・判断力・表現力が身に付いてきた」と評価した教員は31.4%に留まる（同調査）など、学習過程や指導内容が生徒の能力育成と効果的に結び付いていない状況が見られる。また、総合的な学習の表現力にかかわる生徒自身の評価でも、「報告や発表などでうまく意見を伝えられるようになってきた」と答えた生徒は44.5%と全体の半数以下となっている実態がある（図1）。群馬県を含め全国の研究校での実践においても「まとめたことを分かりやすく伝える」などの表現力で課題が挙げられている。同様の課題は協力校における昨年度までの取組からも明らかとなっている。

そこで、協力校の総合的な学習単元「沼田市に生きる」において、探究の過程の「まとめ・表現」段階である中間発表の場で、言語を活用する過程を段階的に設定し、具体的な言語活動に取り組めば、自分の考えや意見を分かりやすくまとめ表現する力を育成することができるのではないかと考え、本主題を設定した。

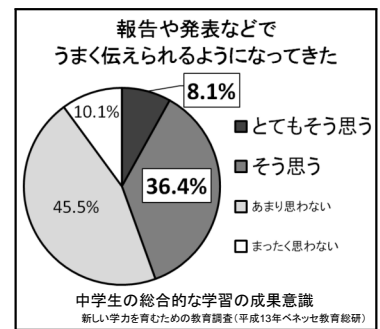


図1 総合的な学習の表現力に関する生徒の自己評価

II 研究のねらい

総合的な学習の「まとめ・表現」の過程において、自分の考えや意見を分かりやすくまとめ表現する力を育成するために、「まとめ・発表・交流・再構成」の段階を設定して学習シートを取り入れた言語活動に取り組むことの有効性を明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 中間発表に向けて研究内容をまとめる段階において、「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見」を整理して「中間発表レポートを書く」言語活動を取り入れれば、情報と関連付けながら自分の考えや意見を導き出すことができるだろう。
- 2 中間発表の場で研究内容を発表する段階において、中間発表レポートを基にして説明用メモを作成し、自分の研究を「説明する」言語活動を取り入れれば、相手意識を明確にして自分の考えや意見を伝えることができるだろう。
- 3 中間発表の場で研究内容について互いに考えや意見を交流する段階において、自分の研究と比較しながら書いた助言を基に「助言し合う」言語活動を取り入れれば、多様な視点から検討して自分の考えや意見を広げることができるだろう。
- 4 中間発表後に研究内容を再構成する段階において、「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見」を成果と課題の視点から再整理して「振り返りレポートを書く」言語活動を取り入れれば、自分の考えや意見を更新して深めることができるだろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え

(1) 総合的な学習における言語活動とは

答申や学習指導要領でも示されているとおり、総合的な学習では、言語により「整理」したり「分析」したりして考え、それを「まとめ」たり「表現」したりして自分の考えを深める学習活動が重視されている。このことから、総合的な学習にお

ける言語活動の中心場面は、探究の過程の「整理・分析」「まとめ・表現」であるととらえることができる。それぞれの場面で言語を用いた活動を手だてとして取り入れ、総合的な学習の目標や身に付けたい資質や能力及び態度を育成することが大切であると考えられる。

(2) 総合的な学習と各教科等との関連

総合的な学習において、各教科等で身に付けた知識・技能等を生かす学習場面を設定することで、生徒が各教科等を学ぶ意味を実感し、前向きに取り組むようになることが期待される。また、このことが各教科等で身に付けた知識や技能等を確実に定着させることになり、総合的な学習の価値を実感することにもつながる。このように総合的な学習と各教科等とは互いに補い合い支え合うものである。具体的な関連の仕方としては、

- a 各教科等で身に付けた「知識や技能」が直接的に関連する場合
- b 各教科等で身に付けた「ものの見方や考え方が総合的・間接的にかかわる場合

が考えられる。

協力校の総合的な学習単元「沼田市に生きる」は、「沼田市」を学習対象として、個人で課題を設定し探究活動に取り組む学習である。調査体験活動を中心に情報を収集し、中間発表で新たな課題を見いだして追究を深め、最終発表で研究成果を発信していく学習活動を行う。このように、本単元の学習は生徒一人一人の課題によって学習事項が異なり、各教科等の知識や技能に直接的に結び付けることは難しい。

そこで、本研究では上記bのように、各教科等で身に付けた「ものの見方や考え方を」、総合的な学習の基盤となるものとして学習活動に位置付け、各教科等で学んだことの有用性を実感しながら、学び方やものの見方・考え方を確かなものにしていけるようにする。

(3) 総合的な学習の言語活動と国語科との関連

「国語科で培った言語の能力を他教科でも活用する(答申)」という言語活動の充実の視点から、各段階における言語活動の内容に沿って国語科の指導事項と関連付けした学習を行っていく。具体的な活動内容としては、国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域との関連を図り、情報や意見をまとめて表現媒体を作成したり、その内容を音声言語で伝えたり、伝えられたことを基に話し合ったりする言語活動を取り入れていく。

(4) 「まとめ・発表・交流・再構成」の言語活動とは
本研究では、言語を活用する過程を「まとめ・発表・交流・再構成」として段階的に位置付け、それぞれの段階で具体的に設定した言語活動を通して目指す生徒像の実現を図る。また、各段階を一連の活動としてとらえ、相互に関連させて主題に示した力の育成を目指していく。そのための共通する視点として、「探究の過程」の「整理・分析」過程と関連させて設定した「整理・分析の視点」(図2)を各段階で活用する。

具体的には、収集した情報を整理する活動や自分の考えや意見を導き出す活動において、「整理・分類の視点」をそれぞれ「分類の観点」「考え方の観点」として細分化して設定し、情報を整理しながら自分の考えや意見を導き出して分かりやすく表現したり、共通の視点から意見交流をして自分の考えを深めたりできるようにする。

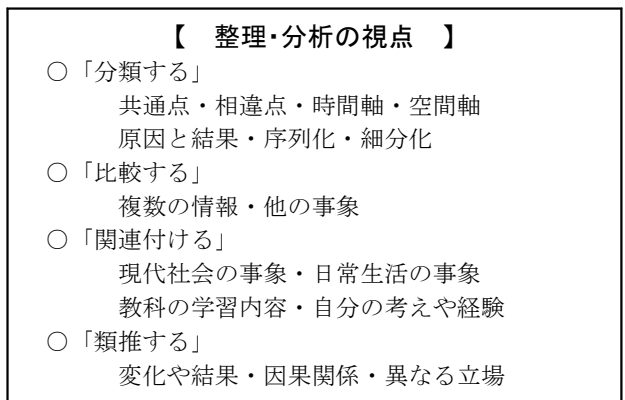


図2 各段階で活用する「整理・分析の視点」

(5) 各段階の具体的な言語活動について

① 「まとめ」の段階:「中間発表レポートを書く」
情報と関連付けながら自分の考えや意見を導き出すために、「中間発表レポートを書く」という言語活動を取り入れる。具体的には、情報を整理・分析しながら得た「事実」と「意見」を中心にしたレポートを作成する。この段階で導き出した「自分の考えや意見」は、学習全体の基盤としてすべての段階で生かしていく。

② 「発表」の段階:「説明する」

相手意識を明確にして自分の考えや意見を伝えられるようにするために、研究内容を「説明する」という言語活動を取り入れる。具体的には、レポートの説明用メモを用いて、小集団の場で相手に分かりやすく伝わるよう工夫しながら説明する。

③ 「交流」の段階:「助言し合う」

異なる視点から検討して自分の考えや意見を広げるために、中間発表の説明を聞いて「助言し合う」言語活動を取り入れる。具体的には、班の友達のレポートに対して助言を書き、各自の研究発表後に助言を発表して互いに考えを交流し合う。

④ 「再構成」の段階:「振り返りレポートを書く」

自分の考えや意見を更新して深めるために、「振り返りレポートを書く」言語活動を取り入れる。具体的には、中間発表の意見交流を基に成果と課題の視点から再整理した「事実」と「意見」を中心とした振り返りレポートを作成する。

(6) 各段階で用いる学習シートについて

各段階の言語活動を充実させるために、活動内容に合わせて作成した学習シートを用いる(図3)。協力校の総合的な学習の単元において生徒一人一人の多様な追究課題に対応できるようにするとともに、汎用性に留意し、多様な学習内容における「まとめ・表現」過程で広く活用できるようにする。

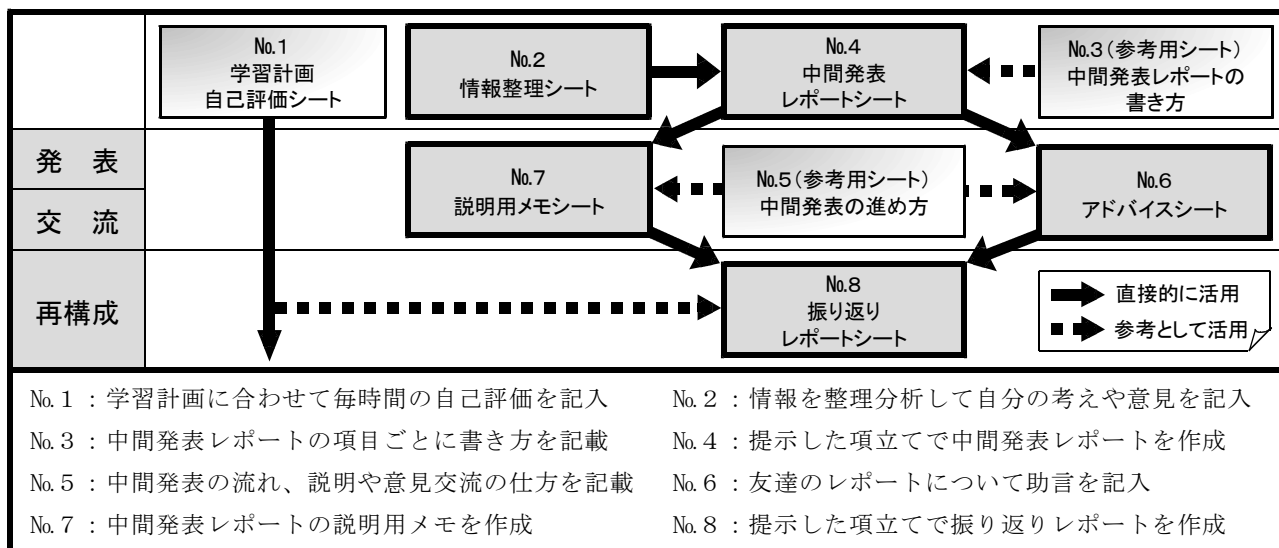
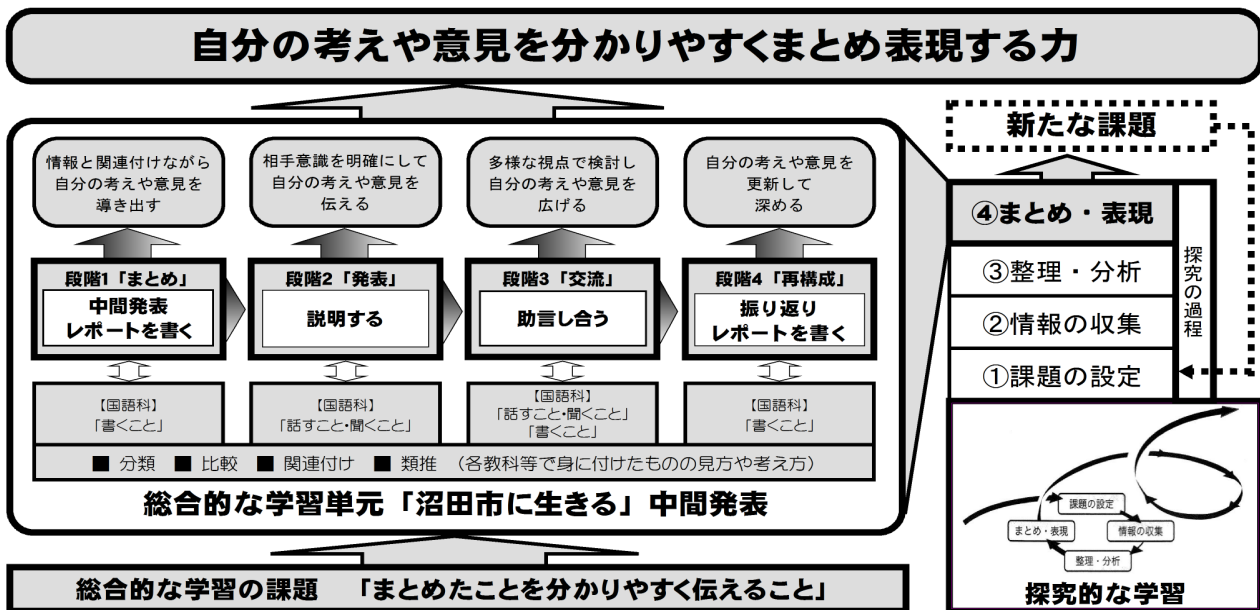


図3 各段階で活用する学習シートの関連と内容

2 研究構想図

以下に本研究の構想図を示す。



3 検証計画

(1) 研究実践の計画

対 象	第2学年88名	授業者	長期研修員 大竹 敏之	期 間	平成21年9月10日～10月6日
単 元	「沼田市に生きる」中間発表（全8時間） ①まとめ（情報整理2時間 中間発表レポート作成1時間） ②発表・交流（発表準備1時間 助言作成1時間 中間発表2時間） ③再構成（振り返りレポート作成1時間）				


(2) 検証のための生徒群

A 群	情報から自分の考えや意見を導き出し、相手に分かりやすく文章に表したり説明したりすることができる。また、相手の立場を尊重して話し合い、自分の考えを広げられる。
B 群	情報を整理して文章に表したり説明したりすることはできるが、情報と関連付けながら自分の考えや意見をまとめたり、相手に分かりやすく伝えたりすることに課題がある。
C 群	情報を整理したり自分の考えや意見をまとめたりすることに課題があり、文章に表したり説明したりすることにも苦手意識をもっている。適切な支援や助言が必要である。

(3) 各段階における検証の観点と方法

段 階	検証の観点と方法	
見 通 し 1	ま と め	観点 「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見」を整理して、「中間発表レポートを書く」言語活動を取り入れたことは、情報と関連付けながら自分の考えや意見を導き出すために有効であったか。 方法 ○事前事後アンケート分析 ○生徒の活動分析 ○学習シート分析 ○T.T職員の評価
	発 表	観点 中間発表レポートを基にして説明用メモを作成して、自分の研究を「説明する」言語活動を取り入れたことは、相手意識を明確にして自分の考えや意見を伝えるために有効であったか。 方法 ○事前事後アンケート分析 ○生徒の活動分析 ○自己評価シート分析 ○T.T職員の評価
見 通 し 3	交 流	観点 自分の研究と比較しながら他者に助言を書き、「助言し合う」言語活動を取り入れたことは、多様な視点から検討して自分の考えや意見を広げるために有効であったか。 方法 ○事前事後アンケート分析 ○生徒の活動分析 ○自己評価シート分析 ○T.T職員の評価
	再 構 成	観点 「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見」を成果と課題の視点から再整理して、「振り返りレポートを書く」言語活動を取り入れたことは、自分の考えや意見を更新して深めるために有効であったか。 方法 ○事前事後アンケート分析 ○生徒の活動分析 ○学習シート分析 ○T.T職員の評価

V 研究授業実践(全8時間)

段階	時間	主な学習活動(★は本時のねらい)	主な支援と生徒の様子	学習シート
【まとめ】「中間発表レポートを書く」	第1時・第2時	<p>★収集した情報を多様な視点で整理・分析しながらまとめ、自分の考えや意見を導き出すことができる。</p> <p>◎収集した情報を分類の観点に沿って分類して書く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【学習シートNo.2に示した「分類の観点」】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 共通点・相違点 ・ 順序性 ・ 細分化 ・ 因果関係 ・ 時間軸 ・ 空間軸 </div>	<p>○他者に伝えたい情報だけに絞って分類させたことで、自分の伝えたいことが明確になっていた。</p> <p>○「分類の観点」を参考に情報を分類することで、様々な視点が混在する情報を整理することができた。</p> <p>○「分類の観点」の活用状況を観察すると、「共通点・相違点・細分化」を用いた生徒が多かった。「因果関係」「時間軸」から整理した生徒のほとんどはA群であった。</p> <p>○具体的な「分類の観点」を示しながら個別に支援したので、C群の生徒にも書けない生徒がいなかった。</p>	No.2 1
		<p>◎分類した情報を比較して気付いたことなどを書く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【生徒の記述例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・養蚕農家の家は蚕のことを考えて作ってあることが分かった。 ・マップからカラスは木や建物が多い場所に生息していることが分かった。 ・沼田市で捨てられる犬は雑種が一番多いことが分かった。 </div>	<p>○「気付いたこと・分かったこと・発見したこと」について書かせたことで研究課題に対する見方が広がった。また、分類した情報を精選したり重点化したりすることができた。特に情報量が多いA群の生徒には効果的だった。</p> <p>○「気付いたこと・分かったこと・発見したこと」を「事実」として抽出することが難しく、「意見」と混同している生徒もC群にいたが、全体的には整理した情報を違った角度から見直して再構成することができた。</p>	No.2 2
		<p>◎整理した情報から考えられることを「結び付け・推理予想」の2つから書く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【学習シートNo.2に示した「考え方の観点」】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「結び付け」 <ul style="list-style-type: none"> ・ 他の地域 ・ 現代社会の事象 ・ 教科の学習内容 ・ 自分の経験 ●「推理予想」 <ul style="list-style-type: none"> ・ 原因 ・ 変化 ・ 異なる立場 ・ 他の時代 ・ 日常生活 ・ 自分の知識 ・ 結果 ・ 規則性 </div>	<p>○事前に「事実」だけを整理させて考えさせたので、「自分の考えや意見」に焦点化して書くことができた。</p> <p>○「結び付け」よりも「推理予想」の視点から考えを書く生徒の方がB群を中心に多かった。A群の生徒は両方の視点を用いて考えを広げていた。</p> <p>○具体的な「考えの観点」を例示したので、整理した情報と関連させながら自分の考えを書くことができた。</p> <p>○「考えの観点」の活用状況を観察すると、「結び付け」は「他の地域・時代」「自分の知識・経験」を多くの生徒が活用していた。また、「推理予想」に関しては、「原因・変化」を用いて考える生徒が多かった。</p>	No.2 3
		<p>◎自分が最も伝えたいことを書く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【生徒の記述例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沼田名物の「だんご汁」をもっと広めたい。 ・伝統ある沼田祭りを今後も残すべきだ。 ・沼田の桐下駄のよさを伝えていきたい。 </div>	<p>○提言、決意などの例示された文末表現を用いながら書く生徒が多かった。また、B群の中には伝えたいことを書くことによって自分の主張に気付く生徒もいた。</p> <p>○他者への提言や主張を書く生徒が多かったが(65名)、自分の決意を述べている生徒もいた(18名)。</p>	No.2 4
	第3時	<p>★「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見」をまとめて、中間発表レポートを書くことができる。</p> <p>◎前時の学習シートを参考にしながら中間発表レポートを書く。</p> <div style="text-align: center;">  <p>図4 レポートを作成する生徒</p> </div>	<p>○学習シートNo.3「中間発表レポートの書き方」で各項目ごとに書き方を確認したので、各群とも生徒が自分の力で学習を進めていた(図4)。レポートの内容や書き方に関する事など、個に応じた支援も効果的に行えた。</p> <p>○学習シートNo.2に整理した「事実」と「意見」を用いて書いたのでC群の生徒もレポート形式に文章をまとめることができた。また、各項目に即して例示した文末表現を活用して書く姿も見られた。B群の生徒は文末表現に合わせて考えを修正したり補足したりしながら書く生徒が多く、考えが広がっている様子がうかがえた。</p> <p>○文章の記載量に関しては、「事実」部分で平均11.9行分(用意した用紙の63%)、「意見」部分で平均8.9行分(同51%)を書くことができた。C群は「事実」が9.4行分、「意見」が6.3行分と全体平均よりも少なかったが、全く書けない生徒はいなかった。</p>	No.2 1 2 3 4 No.3 No.4

【発表】「説明する」 ／ 【交流】「助言し合う」	第4時	<p>★相手の立場を尊重しながら研究内容に対して助言を書くことができる。</p> <p>◎友達のレポートを読んで助言を書く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【生徒の記述例】 ○…よさ ▲…助言】 ○今と昔を比べた上で理由を考えているのがよかったです。 ○自分の意見がしっかり書いてあって「本当にそうなのかも」と思われます。 ▲自分なりにどうすれば改善できるかを考えてみるのもいいかもしれません。 ▲「こうなってほしい」という意見を入れると、さらによくなると思います。</p> </div> <p>○異なる追究テーマの生徒で班編制をしたので、研究内容に興味をもちながら友達のレポートを読んでいた。 ○研究の「よさ」に目を向けたり「批判的」な見方をしたりしながら多面的な助言を書くことができた。C群の生徒は「よさ」について書いている生徒が多かった。 ○内容に関する質問だけでなく「情報整理の仕方」や「考え方」への助言を書くようにしたので、A群の生徒は「分類の観点」や「考え方の観点」を振り返って自分の研究と比較しながら考えていた。</p>	No5 ↓ No6
	第5時	<p>★自分の研究内容を相手に分かりやすく説明するためのメモを作成することができる。</p> <p>◎説明用メモを作成する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【生徒の記述例】 「身近な鳥が住める環境」 ○事実・ツバメのエサ(飛んでいる昆虫) ・ツバメが巣を作る場所と理由 ・インタビュー結果(3件)→大まかに ○意見・人の出入りのある店とない店 ・ツバメに関する言い伝えから ○最も伝えたいこと ・産業の変化 ・ツバメを見守る</p> </div> <p>○学習シートNo.2「情報整理シート」やNo.4「中間発表レポートシート」を見ながら、自分が伝えたいことを短い言葉や文でまとめていた。「事実」「意見」「主張」など、これまでの学習と関連させた欄を設けて書かせたので各群とも戸惑うことなく活動に取り組んでいた。 ○A群の生徒は、要約、重点化、補足等の方法を用いながら重点先行の書き方で書いていた。C群の生徒もレポートの内容を生かして書くことができた。</p> <p>◎作成した説明用メモを用いて説明の練習をする。</p> <p>○学習シートNo.5「説明の仕方」に示した「分かりやすい説明の仕方」に注意しながら他班の友達と説明し合っていた。発表時間に合わせて内容を修正する姿も見られた。</p>	No2 No4 No5 ↓ No7 No5
	第6時・第7時 ◆ 中間発表 ◆	<p>★研究内容を分かりやすく伝えたり、多様な視点で検討して考えを広げたりすることができる。</p> <p>◎小集団で中間発表を行い、研究を説明したり、互いに助言し合ったりする。</p>  <p>図5 中間発表(説明する生徒)</p>  <p>図6 説明・意見交流の板書記録</p> <p>○説明する活動に対して抵抗感をもつことなく、分かりやすく伝えることに集中している様子が見られた(図5)。 ○事前に「説明用メモシート」を作成していたので、C群の生徒も自信をもって説明することができた。 ○助言の前に必ずよさを述べさせたので発表者の満足度が高まり、前向きに聞こうとする態度が見られた。 ○情報整理や考え方に関する助言を述べ合ったので、多様な見方や様々な視点に気付くことができた。情報や考えを「比較」することのよさに気付く生徒もA群にいた。 ○事前に「中間発表レポート」を読んだ上で助言を書いたので、研究内容に沿った建設的な助言が多かった。意見の交流が発展して深い議論になる場面もあった。 ○いい意味での批判的な助言や鋭い指摘・質問も見られたので、議論が活発になり考えも深まった。 ○教師が板書した説明や意見交流の記録(図6)を参考にして意見を述べている生徒も見られた。また、論点を共有化して意見を交流することもできた。</p>	No5 No6 No7 レポート集
【再構成】「振り返りレポートを書く」	第8時	<p>★中間発表の学習を基に振り返りレポートを書き、自分の考えや意見を更新することができる。</p> <p>◎中間発表を振り返り「事実」と「意見」について成果と課題を書く。</p> <p>◎振り返りレポートを書く。</p> <p>◎友達と振り返りレポートを交換して読み合う。</p> <p>○友達からの助言や意見交流を基に「よかったこと」と「修正等が必要なこと」を具体的に書いていた。記入数を絞ったのでC群の生徒も書くことができた。 ○中間発表レポートと同様に、文章構成・文型・文末などを具体的に例示しながら作成させたので、すべての生徒が600～800字程度のレポートを書くことができた。 ○文章の記載量に関しては、平均で19.6行分(用意した用紙の79%)を書くことができた。C群も平均18.6行分(同75%)であり、書けない生徒はいなかった。 ○他者の振り返りに興味をもち、進んで交流しようとする姿が見られた。多様な考え方に触れて考えも深まった。</p>	No2 No4 No6 ↓ No8

VI 結果と考察

1 中間発表に向け研究内容をまとめる段階において、「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見」を整理して「中間発表レポートを書く」言語活動を取り入れたことは、情報と関連付けて自分の考えや意見を導き出すために有効であったか。

(1) 「中間発表レポートを書く」ことについて

① 「情報の整理」に関して

レポート作成の前段階として初めに収集した情報を整理する活動を行った。生徒の自己評価を分析したところ、「情報を分かりやすく分類すること」について、学習後に「できる・まあまあできる」と回答した生徒は全体の87%であった。事前と比べて33ポイント増加し「できる」と答えた生徒も3倍以上となるなど、情報を分類整理できるようになったと評価する生徒が多くなっている。

「情報の整理」では活動の参考として示した「分類の観点」が有効であり、情報を多角的に検討して思考を広げることができた。また、C群の生徒に対する支援の視点としても効果的で、情報を分かりやすく整理させることができた。同学年の職員も活動の有効性を次のようにとらえている。

【T.Tで参加した同学年職員の意見】

- 「分類の観点」を示したことは、多岐に渡る情報を分かりやすく整理する上で効果的だった。
- シートの項目に沿って書くことでC群の生徒も情報を整理することができていた。

② 「自分の考えや意見」に関して

情報を整理した後に「結び付け」と「推理予想」の視点から自分の考えを書く活動を行った。生徒の自己評価を分析したところ、「情報から自分の考えや意見を導き出す」ことについて、学習後に「できる・まあまあできる」と回答した生徒は全体の89%であった。事前の評価と比べて34ポイント増加しており、「できる」とした生徒も全体の半分近くを占めるなど、考えや意見を導き出せるようになったと評価する生徒が多くなっている。

自分の考えを書く活動では参考として示した「考え方の観点」が有効であり、整理した情報と結び付けて考えることで多くの生徒が考えや意見を導き出すことができた。また、学習シートを分析すると、思考が深まっている生徒ほど多くの観点をういており、多様な観点について考えさせる

ことが自分の考えや意見を広げるために効果的であると考える。学年職員も活動の有効性を次のようにとらえている。

【T.Tで参加した同学年職員の意見】

- 推測がよくできていた。「考え方の観点」を示したことで多様な見方で思考することができた。
- 「異なる立場」という観点はA群の生徒にとっては考えが広がる効果的な視点だった。

③ 「中間発表レポート作成」に関して

情報を整理して自分の考えや意見を導き出した後「まとめ」段階の言語活動として「中間発表レポートを書く」活動を行った。図7は「調べたことや自分の考えを読み手に分かりやすく書く」ことに関する生徒の自己評価である。

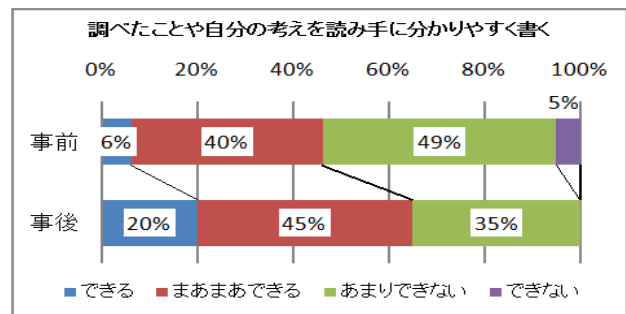


図7 レポート作成に関する生徒の自己評価

事後に「できる・まあまあできる」と回答した生徒は合計で19ポイント増加している。「できる」と答えた生徒も事前の3倍以上となるなど、分かりやすく書けるようになったと評価する生徒が多くなっている。

自己評価向上の要因として考えるのは次の二点である。一点目は、情報整理シートに記載した「事実」と「意見」を再構成して文章化させたので、書く「内容」が明確だったことである。C群の生徒も停滞することなく文章化することができた。二点目は、「事実」と「意見」に対応した文末を例示したので、書く「方法」が明確だったことである。示された文末に合わせて書くことにより内容も精選されていた。このように、書く内容と方法を示し、事実と意見を区分して書くことによって情報と考えが整理され、自分の考えや意見が明確になっていったと考える。

(2) 生徒の学習状況評価から

「まとめ」段階の評価規準（整理した情報と関連させた考えや意見を学習シートや中間発表レポートに書いている）に照らし合わせて学習状況を

評価すると、レポート未提出者を除く全ての生徒が「おおむね満足」以上の段階にあり「十分満足」の生徒も過半数となる53%であった。図8は「十分満足」と評価される生徒（B群）のレポートにおける「自分の考えや意見」部分の抜粋である。

〇〇人形が若者に人気がないのは現代感がないからだと考える。しかし、現代のものを取り入れてしまっただけでは伝統が崩れていってしまうのではないか。(中略)私はみんなによさを知ってもらうために、お知らせの紙などを作り、もっと小学生に体験してもらいたいと思う。

図8 生徒のレポート(自分の考えや意見)

このように、多くの生徒が評価規準に対して満足できる状況にあり、自分で導き出した考えや意見を中間発表レポートに書くことができた。

以上のことから、「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見」を整理して「中間発表レポートを書く」言語活動を取り入れたことで、情報と関連付けて自分の考えや意見を導き出すことができたと考えられる。

2 中間発表の場で研究内容を発表する段階において、中間発表レポートを基にして説明用メモを作成し、自分の研究を「説明する」言語活動を取り入れたことは、相手意識を明確にして自分の考えや意見を伝えるために有効であったか。

(1) 「説明する」ことについて

「発表」段階の言語活動として中間発表の場で「説明する」言語活動を行った。図9は「調べたことや自分の考えを聞き手に分かりやすく説明する」ことに関する生徒の自己評価である。

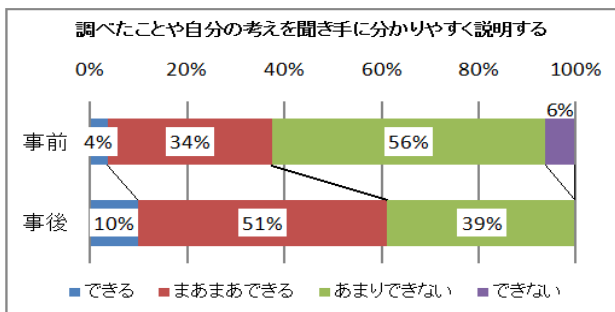


図9 研究内容を説明することに関する生徒の自己評価

事後に「できる・まあまあできる」と回答した生徒は合計で23ポイント増加した。事前に「あまりできない」と答えた生徒も56%にあたる25名が「まあまあできる」に向上しているなど、分かりやすく説明できるようになったと評価する生徒が多

くなっている。

自己評価向上の要因として考えるのは次の二点である。一点目は、自分が伝えたいことをまとめた説明用メモを作成することによって、研究内容が精選され説明することが明確になったことである。二点目は、説明する際の効果的な文末や話し方を示したので、相手に分かりやすく伝えることに焦点化して活動できたことである。このように、伝えたいことを整理し聞き手のことを考えながら説明することによって、相手意識が高まり自分の考えを筋道立てて伝えることができたと考えられる。

(2) 生徒の学習状況評価から

「発表」段階の評価規準（説明用メモを用いながら自分の研究内容を相手に分かりやすく筋道立てて説明している）に照らし合わせて学習状況を評価したところ、92%の生徒が「おおむね満足」以上の段階であった。また、「十分満足」と評価される生徒も全体の27%にのぼった。このように、多くの生徒が評価規準に対して満足できる状況にあり、学習活動は有効であったと考えられる。

以上のことから、中間発表レポートを基にして説明用メモを作成し、自分の研究を「説明する」言語活動を取り入れたことで、相手意識を明確にして自分の考えや意見を伝えることができたと考えられる。

3 中間発表の場で研究内容について考えや意見を交流する段階において、自分の研究と比較しながら書いた助言を基に、「助言し合う」言語活動を取り入れたことは、多様な視点から検討して自分の考えや意見を広げるために有効であったか。

(1) 「助言し合う」ことについて

① 「助言する」ことに関して

「交流」段階の言語活動として中間発表の場で「助言し合う」活動を行った。図10は、「友達の考えに対して相手の立場を大切にしながら助言する」ことに関する生徒の自己評価である。

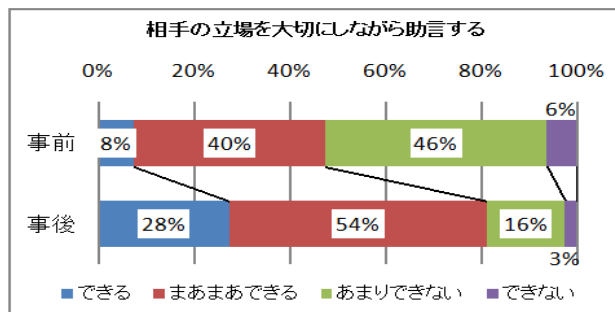


図10 友達へ助言することに関する生徒の自己評価

学習後に「できる・まあまあできる」と自己評価した生徒は34ポイント増加した。特に「できる」については3倍以上の伸びとなっている。事前に「あまりできない」と答えた生徒の68%（25名）が事後に評価が向上するなど、相手の立場を考えながら助言できるようになったと評価する生徒が多くなっている。

これまでの学習を生かし「事実」と「意見」の観点から助言を作成したことが効果的であり、自分のレポートと比較しながら考えて助言することができていた。また、「よさ」・「助言」の順で発言させたことで、相手の立場を理解しつつ異なる視点から考えを述べることができた。

② 「意見の交流」に関して

助言する活動と並行して考えや意見の交流を行った。生徒の自己評価を分析すると、「互いの考えを比べながら話し合い自分の考えを広げる」ことについて、学習後に「できる・まあまあできる」と回答した生徒は事前と比べて31ポイント増加した。事前で「あまりできない」と答えた生徒に関しては、その64%にあたる27名の評価が向上しており「できる」と答えた生徒も7名いた。

自己評価向上の要因として考えるのは次の二点である。一点目は、話し合いの論点を明確に示したことである。司会進行を教員が行い、ポイントとなる情報や考えを板書しながら交流することで視点を共有化して考えを広げることができた。二点目は、交流する場を複数回設定したことである。助言する場と自由に発言する場を設けて同様の過程を繰り返したことで、自分とは異なる見方に気付くことができた。学年職員も活動の有効性を次のようにとらえている。

【T.Tで参加した同学年職員の意見】

- 他者からの意見やアドバイスは、特にB群の生徒にとって考えを深めたり様々な視点に気付いたりする上でとても効果的だった。
- 他者から学んだことを自分に生かそうとする姿が見られ、研究の課題が明らかになった生徒も多かった。

このように、互いに助言し合い意見を交流させることによって考え方の多様性や様々な視点に気付くことができた。また、助言されたり質問を受けたりする中で自分の研究の特殊性や有用性に気付き、自信を深める生徒も見られた。

(2) 生徒の学習状況評価から

「交流」段階の評価規準（相手の立場を尊重し自分の考えや意見と比較しながら助言したり話し合ったりしている）に照らし合わせて学習状況を評価した。「おおむね満足できる」以上の段階にある生徒は94%であり、「十分満足できる」生徒も全体のほぼ3分の1にあたる32%であった。このように、多くの生徒が評価規準に対して満足できる状況にあり、学習活動は有効であったと考える。

以上のことから、自分の研究と比較しながら助言を書いて互いに「助言し合う」言語活動を取り入れたことで、多様な視点から検討して自分の考えや意見を広げることができたと考える。

4 中間発表後に研究内容を再構成する段階において、「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見を成果と課題の視点から再整理して「振り返りレポートを書く」言語活動を取り入れたことは、自分の考えや意見を更新して深めるために有効であったか。

(1) 「振り返りレポートを書く」ことについて

「再構成」段階の言語活動として、事実と意見を再整理して「振り返りレポートを作成する」活動を行った。生徒の自己評価を分析すると、「話し合いや助言を生かして自分の考えや意見を修正・変更する」ことについて、学習後に「できる・まあまあできる」と回答した生徒は全体の90%となっており「できる」と答えた生徒だけで5割を占めていた。「できる」とした生徒の58%（23名）は評価が向上した生徒であった。

振り返りレポートを分析したところ、自分の考えや意見に関する修正点や変更点を記述できている生徒は全体の95%に達した。図11は、生徒が振り返りレポートに記載した修正点や変更点を分析し、類型化してまとめたものである。

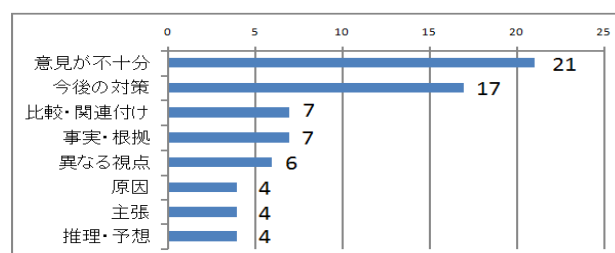


図11 振り返りレポートにおける修正・変更の観点活用人数

中間発表の学習を通して、自分の考えや意見の不十分さに気付いている生徒が多いことが特徴的

である。また、研究課題に関する今後の対策や、比較・関連付け・異なる視点など、最終発表に向けて課題を追究する際に生かせる考え方に自ら気付けた生徒も多い。このように、レポート形式で学習の振り返りを行うことで、自分の考えや意見を再構成しながら見直し新たな考えや課題を見いだすことができたと考える。

(2) 生徒の学習状況評価から

「再構成」段階の評価規準（自分の考えや意見の修正点や改善点を学習シートや振り返りレポートに書いている）に照らし合わせて学習状況の評価すると、未提出者を除くすべての生徒が「おおむね満足できる」以上の段階にあり、「十分満足できる」生徒も全体の過半数となる51%であった。図12は「十分満足できる」と評価される生徒（A群）の振り返りレポート（抜粋）である。

（略）調べて分かった事実について、修正や付け足しが必要な点は大きく二点あります。一点目は情報をもう少し分類するという点です。調査したことを過去と現在、さらに未来と比較し、もっと説得力のあるレポートやまとめにしていけたらと思います。また、そのために調査方法もインタビューだけでなく、実際に実験や調理をして確かなものを得たいです。（略）

自分の考えや意見について、自分の研究でよかった点は、調査の感想だけでなく、これからどうなっていくか、どうするべきかなどの推理や予想もしっかり書けたという点です。感想だけでは今までの研究だけで終わってしまうので、最終発表に向けての課題を見付けるためにも推理や予想を書けたのはかなりプラスになったと思います。

また、修正や付け足しが必要な点は、感想や推理、予想の他に、調査結果から考察した自分の考えや意見を述べるという点です。例えば、「～という結果だったが、自分は～と思う。～となったら望ましい。」といった事実と意見の比較ができたらいいと考えました。（略）

図12 生徒が作成した「振り返りレポート」

このように、多くの生徒が中間発表の学習を振り返って修正点や改善点を書き、自分の考えや意見を更新することができた。

以上のことから、「調べて分かった事実」と「自分の考えや意見」を成果と課題の視点から再整理して「振り返りレポートを書く」言語活動を取り入れたことで、自分の考えや意見を更新して深めることができたと考える。

VII 成果と課題

1 成果

- 言語を活用する過程を段階的に設定して言語活動に取り組むことにより、本研究で育成を目指した「自分の考えや意見を分かりやすくまとめ表現する力」を向上させることができた。探究的な学習である総合的な学習に言語活動を取り入れることの有効性が明らかになった。
- 総合的な学習の「まとめ・表現」過程における具体的な言語活動を提示することができた。「レポートを書く」「説明する」「助言し合う」という言語活動により、課題に対する考えが深まったり追究の視点が広がったりするなど、探究的な学習の質も高めることができた。
- 総合的な学習の言語活動における効果的な学習シートを作成することができた。活動の手順や文型などを具体的に示すことにより、言語活動を手だてとして機能させることができた。また、活動の内容と方法を明示することにより、C群の生徒も自分の力で学習を進められた。

2 課題

- 総合的な学習における言語活動の基盤となるのは国語科で育成する言語能力であり、総合的な学習と国語科を相互に関連させた指導の在り方をさらに検討する必要がある。
- 探究の過程はスパイラルに繰り返されることから、「まとめ・表現」の過程だけでなく他の過程における言語活動の在り方も検討する必要がある。
- 「整理・分析の視点」として設定した「比較・分類・関連付け・類推」に関して、生徒の思考の流れや身に付けさせたい力を吟味しながら相互の関連性を再検討する必要がある。

<参考文献>

- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』（2008）
- ・横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 編『各教科等における「言語活動の充実」とは何か』三省堂（2009）
- ・高木 展郎 著『各教科等における言語活動の充実—その方策と実践事例—』教育開発研究所（2008）